

大項目 4 学生の受け入れ

【目標】

教育目標を適切に反映させた学生の受け入れ方針を定め、その方針に基づいて適切な体制を整えた上で、適正かつ公正な受け入れを行う。

また、種類・性格・教員組織、施設・設備等の諸条件を基礎に学生収容定員を定めるとともに、その数に基づいて適正な数を受け入れ、教育目標に即した教育・研究指導を行い、教育上の効果を高める。

1) 学部における学生の受け入れ

A群 大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学者選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

●現状把握

造形学部では多様な個性・能力・可能性を持つ学生を受け入れるため、一般入学試験と公募制推薦入学試験の2とおりの選抜方法を採用している。2007年度の入学定員は<表1>のとおりである。

<表1> 造形学部入学定員

学部	学科	入学定員	
造形学部	日本画学科	40	
	油絵学科 油絵専攻	120	
	油絵学科 版画専攻	20	
	彫刻学科	33	
	視覚伝達デザイン学科	102	
	工芸工業デザイン学科	133	
	空間演出デザイン学科	120	
	建築学科	80	
	基礎デザイン学科	73	
	映像学科	<一般>	70
		<公募制推薦>	15
	芸術文化学科	<一般>	65
		<公募制推薦>	15
デザイン情報学科	100		

学生の受け入れ

一般入学試験は造形学部を中心的な試験方法として位置づけられており、入学者の96.6%（大学基礎データ・表 15）を占めている。その目的は基礎学力及び入学後に各学科のカリキュラムを履修するにあたって必要となる基礎的な技能、知識を評価することにある。2007年度の入学試験科目・配点は<表 2>のとおりである。

<表 2> 造形学部一般入学試験科目・配点

日程	学科	科目	配点	科目	配点	総点
前期日程	油絵学科 油絵専攻	国語 外国語	100	デッサン 油絵	300	500
	油絵学科 版画専攻			デッサン		
	視覚伝達デザイン学科		100	鉛筆デッサン デザイン	150 150	500
	工芸工業デザイン学科			鉛筆デッサン デザイン	150 150	
	芸術文化学科		数学、小論文、造形表現テスト のうち1科目選択	100	300	
	デザイン情報学科		数学、造形表現テスト のうち1科目選択	150	350	
後期日程	日本画学科	国語 外国語	100	鉛筆デッサン 着色写生	300	
	彫刻学科			鉛筆デッサン		
	空間演出デザイン学科		100	鉛筆デッサン デザイン	150 150	500
				[選択 A] 数学 鉛筆デッサン	200 100	
	建築学科		100	[選択 B] 数学 鉛筆デッサン	100 200	
				[選択 C] 立体構成 鉛筆デッサン	100 200	
	基礎デザイン学科		小論文 数学、基礎造形のうち1科目選択	100 100	400	
映像学科	感覚テスト 数学、小論文、鉛筆デッサン のうち1科目選択	150 150	500			

試験内容は国語・外国語試験と学科別専門試験科目に分けられる。国語・外国語試験は、前期日程 5 学科〔油絵学科（油絵専攻・版画専攻）、視覚伝達デザイン学科、工芸工業デザイン学科、芸術文化学科、デザイン情報学科〕共通、及び後期日程 6 学科〔日本画学科、彫刻学科、空間演出デザイン学科、建築学科、基礎デザイン学科、映像学科〕共通の 2 回実施される。なお、外国語試験は英語、フランス語より 1 科目選択となっている。学科別専門試験科目は各学科の専門性、入学後に履修するカリキュラムに基づき、それぞれの学科ごとに独自の試験科目、配点、出題内容となっている。

大学の教育内容の性質上、すべての学科が実技試験を設けているが、一部の学科については数学、小論文等との選択制になっている。また、建築学科については 3 つの試験方式から 1 つを選択して受験することとなっている。これは選択の幅を増やすことによって多様な個性・能力・可能性を評価するためである。

また、一般入学試験においては、「国語・外国語科目又は専門試験科目の得点合計が 90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の 5%を限度として合格とする。」という判定基準を設けている。これは一般入学試験の枠内で、より突出した個性・能力・可能性を持つ学生を受け入れることを目的としている。2007 年度には学部全体で 18 名の者がこの判定基準により合格と判定された。

なお、外国人留学生、帰国生に対する入学者選抜は、定員を設けての特別入学試験等は実施せず、一般入学試験のうち「国語」及び「外国語」を「日本語」及び「面接」に振り替えて実施している。学科別専門試験科目は一般の受験と同条件、同内容となる。可否についても一般の受験生と併せて判定される。2007 年度は学部全体で 98 名の志願があり、その内 25 名の者が合格した。

公募制推薦入学試験は 2004 年度より新たに導入された試験方法である。その目的は高等学校での学習成果や面接等を重視することにより、試験成績に表れない創造的な能力や資質をみることにあり、映像学科及び芸術文化学科の 2 学科で実施している。募集人員は映像学科 15 名（映像表現コース 10 名、写真表現コース 5 名）、芸術文化学科 15 名である。出願に際しては高等学校調査書の評定平均値 3.8 以上及び学校長の推薦を条件としており、高等学校における学習成果を尊重している。試験方法は、一次選考として映像学科・芸術文化学科両学科ともに自己推薦調書による審査を行い、二次選考では、映像学科映像表現コースにおいては「構想力テスト及び面接」、写真表現コースにおいては「写真感覚テスト及び面接」を、芸術文化学科においては「小論文」、「プレゼンテーション及び面接」を課している。2007 年度は全入学者中の 3.4%（大学基礎データ・表 15）が公募制推薦入学試験によるものである。

以上のほかに、3 年次編入学試験も実施している。その詳細については「C 群 編入学生及び転科・転部学生の状況」の項で述べる。

●点検・評価

造形学部一般入学試験の過去 5 年間の志願状況は<表 3>のとおりである。

学生の受け入れ

<表 3> 造形学部一般入学試験志願状況

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
募集定員	978	953	953	956	956
志願者数	7,935	7,412	7,389	7,091	6,996
合格者数	1,373	1,365	1,371	1,353	1,358
倍率（志願者数／合格者）	5.8	5.4	5.4	5.2	5.2

志願者数が漸減しているものの、募集定員に対する志願者数は 2007 年度約 7.3 倍あり、合格者数に対する志願者も表のとおり 5.2 倍となっており、一般入学試験の主な目的である基礎学力及び入学後に各学科のカリキュラムを履修するにあたって必要となる基礎的な技能・知識を持った学生の選抜、確保という点では所期の目的を達成しているといえる

また、2007 年度公募制推薦入学試験の志願状況は<表 4>のとおりである。

<表 4> 造形学部公募制推薦入学試験志願状況

学科名		募集人員	志願者数	合格者数
映像学科	映像表現コース	10	61	10
	写真表現コース	5	13	5
芸術文化学科		15	33	21
合 計		30	107	36

2007 年度入学試験においては、志願者が両学科とも募集人員の 2 倍を上回る結果となっており、各学科の教育内容に対して高い意欲をもった志願者を入学させることができたという点では評価できる。

一般入学試験では、基礎学力及び入学後に各学科のカリキュラムを履修するにあたって必要となる基礎的な技能・知識を持った学生を、また公募制推薦入学試験では面接を重視した選考方法により、試験成績に表れない創造的な能力や資質を持った学生の双方を受け入れることができた点で、複数の入学者選抜方法の導入については高く評価できる。

2006 年度においては全国の私立大学の約 4 割が定員割れに陥ったこと、また美術・デザイン系の分野においても一般大学の参入も含めて同系の学部、学科が年々増加しており、2007 年度には統計上入学定員数と受験者数が一致する「大学全入時代」を迎えることなど、本学を取り巻く状況として、受験者の確保については今後困難を極めることが予想される。加えて中学・高等学校での美術時間数が削減され、その影響で美術系志望者の減少も懸念されており、全受験者の中で多いとはいえ美術・デザイン系の志望者を取り込むため、各大学は様々な手段を駆使しつつあるのが現状である。本学においても、今後は受験者の競争率の低下を防ぎ、優れた資質の入学者を維

持していくための方策の一つとして、現行の入学試験制度を見直し、試験方法の多様化を図ることが課題であると考えられる。

●改善・改革方策

2000年度から数度、本学においても入学試験委員会等で大学入試センター試験の導入についての検討がなされてきた。その結果、大学入試センター試験利用の長所として、一つには従前の選抜方法では受験しなかったタイプの新たな受験者層を取り込めるなど、多様な資質を持った人材の確保が期待できること。二つには受験機会を増やし、志願者減少傾向に歯止めをかけることによって受験者間の競争率が高まり、優れた資質の人材の確保が期待できること。三つには大学入試センター試験は地元で受験できるので、地方の受験生にとっては上京日程を専門試験のみに絞ることができるため受験の負担が軽減されること。これにより地方からの志願者が増える可能性があり、結果として首都圏に偏りつつある入学者の出身地に広がりを持たせることが期待できること等の理由により、2008年度入学試験から一般入学試験の定員の一部に大学入試センター試験の成績を利用した試験方式を導入することとした。

また、AO入試をはじめとして多様な入学試験制度が社会的に普及している状況を踏まえ、一般入学試験では対応できない特殊性を持った人材の入学を促すという観点から、公募制推薦入学試験の導入を積極的に進めるべきであるとの結論に至り、現在実施している2学科に新たに4学科を加え、2008年度から公募制推薦入学試験の拡充を図ることとした。

A群 入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

B群 入学者受け入れ方針と入学者選抜方法、カリキュラムとの関係

C群 学部・学科等のカリキュラムと入試科目との関係

●現状把握

本学は「真に人間的自由に達する美術教育」、「教養を有する美術家養成」を建学の精神とし、教育目的として、「美術、デザイン及び建築に関する学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の技能、理論及び応用を教授研究し、人格の完成を図り、個性豊かな教養の高い人材を育成し、もって文化の創造発展、国家社会の福祉に貢献することを目的とする。」(武蔵野美術大学学則第1章)ことを掲げている。この建学の精神、教育目的は入学者の受け入れにも反映されており、造形の専門的な内容を学ぶために必要な技能、知識だけではなく、教養の基礎となる学力を併せ持つ人材を受け入れるための入学者選抜となっている。

一般入学試験においては全学科に「国語」と「外国語」の試験科目を課している。

「国語」は基礎的言語能力及び言語表現に対する理解力、「外国語」は学科専攻に必要

学生の受け入れ

とされる国際性の基礎となる外国語の能力をみることを目的としている。また、学科別専門試験科目には「デッサン」、「デザイン」等の各学科の専門性に係わる実技試験科目に加えて、選択として「数学」と「小論文」等の科目も設けている。「数学」は論理的思考能力をみるためであり、「小論文」についても「数学」同様、言語表現というよりはむしろ論理的思考能力をみることを目的としている。

造形学部のカリキュラムは、文化総合科目と造形専門科目に分かれている。文化総合科目は教養文化に関する科目群、言語文化に関する科目群、身体文化に関する科目群、造形文化に関する科目群によって構成されており、美術・デザイン系のみならず、さまざまな領域の科目が開設されている。造形専門科目は各学科が開設しているそれぞれの専門分野を追究する科目が中心となっている。すべての学生は卒業所要単位124単位のうち、文化総合科目から40～50単位、造形専門科目から50～60単位を修得することとなっている(残りの24単位については自由選択枠)。建学の精神である、「教養を有する美術家養成」を反映したもので、専門的な技能、知識に偏らず、幅広い教養を学ばせようとするものである。このカリキュラムは一般入学試験の試験科目にも連動しており、文化総合科目の素養を国語・外国語試験で、造形専門科目の素養を学科別専門試験科目で考查している。また、一般入学試験における国語・外国語と学科別専門科目の配点比率もこのカリキュラムに対応して設定されている。公募制推薦入学試験においては調査書の評定平均値3.8以上を出願条件とし、高等学校等での学習成果を尊重している。

一方、各学科の教育は専門性がきわめて高く、各学科の専門科目は1年次より開設されている。そのため、一般入学試験、公募制推薦入学試験とも、学科別専門試験科目は各学科の専門性に基づいた独自の出題となっている。これは各学科のカリキュラムを履修するにあたって基礎となる技能、知識を判定するためである。

●点検・評価

入学者受け入れ方針は本学の理念、教育目的等にかなったものとして評価できる。一般入学試験における判定は、学科別専門試験科目の成績を重視するのではなく、国語、外国語、学科別専門科目の合計点の高得点順に合格を決定している。また、合計点で合格圏内であっても、1科目でも配点の20%未満の得点がある場合には不合格となる。公募制推薦入学試験においても、全試験科目の合計点の高得点順に合格を決定し、合計点で合格圏内であっても、1科目でも配点の20%未満の得点がある場合には不合格となる。これは、造形の実技のみに優れた人材を受け入れ、さらに専門的な技能、知識のみを伸ばしていこうとするのではなく、国語、外国語、自己推薦調書等を合否の判定に加えることによって、基礎的な教養を併せ持つ人材を受け入れ、幅広い教養を有する美術家を養成していくという本学の教育姿勢を示すものとして評価できる。

学科別専門試験科目には従来からの「デッサン」、「デザイン」等の各学科の専門実技試験科目に加え、学科専攻によっては選択として「数学」と「小論文」の入試科目を設けている。近年のデザイン系分野での造形教育はコンピューターをツールとして

用いることに比重が置かれつつあるが、このことは言語能力と数理的論理能力を基盤とした高い造形表現を目指す教育目的に対応したものとして高く評価できる。また学科別専門試験科目において選択制を採り入れていることについては、選択制度を導入することによって、選択した入試科目により資質の違った学生を入学させ、入学後に相補的な関係がつけられることを目的としている。その結果、意図したとおり多様な資質をもった学生が集まり、互いを刺激しあい、より良い学習環境を形成するに至っており、高く評価できる。

公募制推薦入学試験については、例えば映像学科ではいくつかの表現分野があるが、どの分野でも作品制作において共同作業を必要とするものが比較的多い。共同作業には協調性、コミュニケーション能力、組織力、指導力などの資質・能力が必要であるが、それらは現在の筆記主体の入学試験で把握することは困難である。そのため公募制推薦入学試験を実施し、「面接」などによる評価を重視することによって映像学科にふさわしい資質を持った学生を獲得することを期しているが、狙いどおりに成果を上げており、評価できる。

入学試験の判定基準は毎年教授会において確認されている。入学試験科目、配点等についても毎年入学試験委員会での検討を経た後、教授会において確認されている。

以上のようにカリキュラムと入学試験科目、配点等については、整合性が高く、概ね良好であり、本学が建学以来目的として掲げてきた美術・デザインの創造的な作家の養成と豊かな教養を備えた社会人の教育という教育理念を発展させることができるものと評価できる。

●改善・改革方策

ますます多様化し高度に進化する造形表現と多彩な芸術領域で活躍する人材育成を目ざし、大学を取り巻く環境の変化に合わせ、2008年度入学試験から大学入試センター試験の導入や公募制推薦入学試験の拡充を行い試験方法の多様化を図ることとした。

しかし、本学の入学試験制度は、教育理念である専門性と教養の融合に留意した受け入れ方針のもとに、本学独自の出題による専門試験と学科試験との総合による選抜方法を入学試験制度の基本として他の選択肢が検討されていくことになる。

B群 入学者選抜試験実施体制の適切性

●現状把握

入学試験に関する業務を円滑に執行するために、学長の付属機関として入学試験委員会が置かれている（武蔵野美術大学入学試験委員会規則第1条）。入学試験委員会は各研究室より選出された委員、国語の出題委員会より選出された委員、外国語の出題委員会より選出された委員、数学の出題委員会より選出された委員、入試準備室（下

学生の受け入れ

段参照)の室長、入試本部長、教務部長、教務部事務部長、企画部事務部長、入試課長、教務課学事担当課長をもって構成されており、各年度のすべての入学試験の大綱はこの委員会で協議された後、教授会において確認される。

一般入学試験の実施に際しては、全学的な臨時の実施体制を編成している。総責任者は学長であるが、入学試験の実施運営に当たっての統括責任者として入試本部長制がとられている。入試本部長は学長補佐から選任され、その任期は2年とされる。

入学試験の業務については全専任教員、助手、職員がそれぞれ分担して当たることとしている。統括機関である入試本部のもとに、入試運営室(試験問題の管理、採点の進行等)、入試準備室(試験会場の整備、試験監督の配当、実技試験のモチーフ設定等)、集計室(採点結果の集計等)、志願書受付担当、入構受付担当、受験票再発行担当などが置かれ、入学試験の円滑な実施にあっている。一方、公募制推薦入学試験、3年次編入学試験については、志願者数がそれほど多くないため、入試本部の統轄のもとに入試課と各学科研究室において実施している。

●点検・評価

試験の厳正かつ公正な実施を確保するために、試験監督には学生アルバイトは一切使用せず、専任教員、助手、職員が当たっており、試験監督として配当される専任教員、助手、職員に対しては、入試期間直前に試験監督説明会を開催するほか、試験当日にそれぞれの試験科目の監督業務についてさらにきめ細かい説明を行っている。また入学試験実施に当たって臨時に設けられた上記の入試運営室、入試準備室、各担当は入学試験実施前に入念な打ち合わせを行い、試験の実施に際して各々の業務を円滑にこなしており、問題ないといえる。

入試本部、入学試験委員会は常設されており、入学試験の実施に関する検討、今後の入学試験についての検討が通年行われている。また、入試課も常設されており、専属の職員が入学試験実施に関わる業務を通年行っている。

●改善・改革方策

入試実施体制は現在のところ特に改善・改革は必要ないが、今後大学入試センター試験を利用した方式の導入や公募制推薦入学試験の拡充等の新たな入学試験の実施にあたっては、入試本部長を中心とした体制をさらに充実させる方向で、体制と組織の再編成を見直していく必要がある。

B群 入学者選抜基準の透明性

●現状把握

造形学部入学試験(一般)の合否判定基準は以下のとおりである。

- ・ 総得点の高得点順に合格者とする。
- ・ 国語・外国語科目又は専門試験科目の得点合計が 90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の 5%を限度として合格とする。
- ・ 受験科目のうち 1 科目でも配点の 20%未満の得点がある場合は、上記に該当する場合でも不合格とする。

判定基準は毎年教授会において確認がなされ、学生募集要項に記載される。また、進学相談会、進学懇談会において受験生、高等学校教員、予備校教員に対して公表される。

●点検・評価

判定基準は明確に示されており、公表の方法も問題ない。

判定基準にある「国語・外国語科目又は専門試験科目の得点合計が 90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の 5%を限度として合格とする。」は突出した個性、能力を持った学生の受け入れを目的に 1995 年度入学試験から実施されており、本学の入学者選抜の特徴となっている。該当して入学してきた学生については、その後の経過を追跡調査しており、2000 年に当時の該当学生全員にヒアリングを実施し、その成果を将来構想委員会において報告したほか、数年毎に、突出した個性、能力を持った学生の受け入れ方法として適切であるかを入学試験委員会において見直していた。一般入学試験という限られた入試制度の中で突出した資質をもった学生を選抜するための一つの試みであり、一定の成果があったと評価できる。

●改善・改革方策

上記の「国語・外国語科目又は専門試験科目の得点合計が 90%以上の者については、高得点順の合格最低点に満たない場合でも、各学科毎のその入学定員の 5%を限度として合格とする。」制度については、2008 年度入学試験から一般入学試験に大学入試センター試験の成績を利用した選考方法が導入され、また公募制推薦入学試験が拡充される等、選抜方法の多様化により上記制度の存在意義が失われるため廃止することとした。

C 群 入学者選抜とその結果の公正性・妥当性を確保するシステムの導入状況

●現状把握

すべての入学試験において匿名での採点を行っている。採点終了後に判定基準に基づき入試本部において合格者原案が作成され、造形学部教授会に所属する全教員によ

学生の受け入れ

って構成される判定会議において合格者を決定、発表している。さらに、正規合格者のほかに必要に応じて補欠者を設けている。補欠者には補欠順位を付した補欠通知を本人に送付している。繰り上げが必要な場合は、補欠者の上位から順次繰り上げ合格を通知している。

また、入学試験の成績は受験生に対して 2001 年度から開示されている。

●点検・評価

受験生の匿名性は厳正に守られており、合格者の決定も判定会議において厳正、公正に決定されている。補欠については、補欠順位を付するための基準を入学試験実施前の教授会において確認し、それに基づき厳正、公正に順位を付している。

成績開示は受験生に対するフィードバックであると同時に入学試験の公正性を学外に対して明確に示すものとなっている。従来、出願時に開示希望の有無を確認し、合格発表終了後に希望者に郵送していたが、封入ミス等の防止のため、2004 年度よりインターネットを利用することとした。希望者は一定の期間、インターネットで個別の暗証番号等を入力して自分の成績を確認できるようになっている。

●改善・改革方策

入学試験の公正性については現在のところ特に改善・改革すべき点はないと思われる。成績開示については開示期間終了後の問い合わせが多数出たため、希望者が期間内に忘れずに成績を確認できるよう開示期間、利用方法等をより周知させる必要がある。また 2007 年度入学試験については成績開示期間を 4 月上旬に設けていたが、2008 年度入学試験から一般入学試験に大学入試センター試験の成績を利用した選考方法を導入するため、2008 年度以降は大学入試センター試験の成績開示期間に合わせて期間を繰り下げる予定である。

B 群 各年の入試問題を検証する仕組みの導入状況

●現状把握

入試問題作成に際して、国語、外国語、数学については毎年出題委員会を組織しており、過去の入試問題の検証を行い、その結果をふまえた上で当該年度の試験問題を作成している。

学科別専門試験については、各学科において入試終了後に検証がなされ、検証結果をふまえた上で、当該年度の問題が作成されている。作成された試験問題は入試本部において過去数年間の試験問題との比較、試験問題としての適切性、公正な実施が可能か等の検証が行われ、問題作成者との協議を重ねた上で決定される。また、試験実施後の判定会議の席上で、すべての科目について出題者より出題主旨説明、及び採点

結果の報告がなされている。

●点検・評価

入試本部において当該年度のすべての試験問題の検証は行われているため、入学試験の実施にあたっては現在までのところ特に問題はない。

しかし学科別専門試験については、各学科の出題の独自性を尊重しているため、たとえば問題の類似化といった全学的に見てバランスを欠いた出題がなされる可能性を否定できない。そのため全学的に入試問題を検証する委員会を設ける等の、より充実した仕組みを設ける必要がある。

●改善・改革方策

問題の類似化を防ぎ、的確性を高め、各学科の目的を明確化するために全学的な関わりのもとに入試問題を検証することを目的とし、専門試験の出題領域を「デッサン・美術系の出題」「デザイン系の出題」「造形表現・小論文の出題」の3つに分け、主任教授並びに入試試験委員会委員の二名を各学科専攻からの構成員とした、出題に関する意見交換を主たる目的とする入試出題反省会を2007年度入学試験以後設けることとした。反省会の結果は翌年度の出題に反映されるよう入試本部並びに入試試験委員会等に報告がなされている。

- A群 ・学生収容定員と在籍学生数、(編)入学定員と入学者数の比率の適切性
 ・定員超過の著しい学部・学科等における定員適正化に向けた努力の状況
- B群 定員充足率の確認の上に立った組織改組、定員変更の可能性を検証する仕組みの導入状況

●現状把握

造形学部の募集定員、3年次編入学定員、収容定員と在籍学生数は「大学基礎データ調書(表14)」のとおりであり、入学定員の合計は2007年度には986名となっている。編入学定員は3年次についてのものであるが、定員の定めのある学科については合計59名となっており、その他の定員の定めのない学科については若干名を受け入れている。これを合わせた全学部全学年の収容定員は3,987名である。

全学部全学年の収容定員に対しての3年次編入学定員若干名を合わせた造形学部全学年の在籍学生数は留年者62名を含め4,226名で収容定員の1.06倍となっている。

●点検・評価

造形学部では18歳人口の減少・高度情報化社会・短期大学部入学志望者の4年生大学への志望の変化・臨時的定員廃止等への対応、定員超過率の是正を目的として1999

学生の受け入れ

年度から短期大学の入学定員を造形学部の新設 2 学科（芸術文化学科、デザイン情報学科）及び既存 9 学科（日本画学科、油絵学科、彫刻学科、視覚伝達デザイン学科、工芸工業デザイン学科、空間演出デザイン学科、建築学科、基礎デザイン学科、映像学科）へ振り替えを行い、また臨時的定員増の廃止にともない、臨時的定員のうち二分の一に相当する定員を恒常的定員に組み入れるといった教育組織の改組転換を行った。その結果、1998 年度までの造形学部の入学定員は 738 名から 1999 年度には 978 名となった。

その後、定員充足率・教育内容といった観点から 2004 年度には 1 年間に期間を限定し「学科定員等検討委員会」を設け、入学定員の見直しが行われた。検討の結果、油絵学科を油絵専攻・版画専攻の 2 専攻とするなど、カリキュラム上の改善と連動して、11 学科中 7 学科（日本画学科、油絵学科、視覚伝達デザイン学科、工芸工業デザイン学科、空間演出デザイン学科、基礎デザイン学科、映像学科）の入学定員増と 1 学科（芸術文化学科）の入学定員減、4 学科（油絵学科、工芸工業デザイン学科、空間演出デザイン学科、基礎デザイン学科）の編入学定員減と 1 学科（建築学科）の編入学定員の新設等の定員の再配分を行い、2006 年度から全入学定員は 986 名となり現在に至っている。

一般入学試験については、退学者、留年・卒業延期者の数を考慮し収容定員と学生数が同じになるように入学者数の調整を行っている。入学試験の合格者の受入人数については過去の退学者数を慎重に見込んだ上で、定員割れを起こさないように考慮し、決定している。収容施設等の制約があるため受入人数については厳格に守られており、欠員が生じた場合には、その都度補欠者から 1 名ずつの繰り上げを行っている。現状の説明どおり、全学部全学年の収容定員に対する学生数の比率は 1.06 倍であり、定員超過の著しい学科は無い。収容定員と学生数は適正な水準にあるといえる。

3 年次編入学試験については、編入制度として学内短期大学部学生の進学希望に応え、造形学部・短期大学部連動教育として有効に位置づけられていたと同時に、学内外の他領域からの進学希望に応えることで、進路選択の幅を広げ、領域間の交流を図ることを目的としていたが、上記の教育組織の改組転換により 2001 年度以降からは本学の短期大学部からの志願者はなくなる結果となった。改組により本学短期大学部の存在を前提とした編入学定員数では募集定員を充足するに足る編入生を受け入れることは、学生の質の維持から難しいとの理由から 2006 年度から募集定員の設定が見直されたことは上記のとおりである。

公募制推薦入学試験は入学定員の一部について 2004 年度入学試験より導入された試験方法であるが、造形学部の入学定員の変更にともない定員充足率・教育内容といった観点から見直しがなされ、2006 年度から公募制推薦入学試験の募集人員は映像学科 5 名（映像表現コース 5 名）、芸術文化学科 20 名から映像学科 15 名（映像表現コース 10 名、写真表現コース 5 名）、芸術文化学科 15 名と変更された。芸術文化学科においては 2006 年度の募集人員の削減にもかかわらず 2004 年度から 2006 年度までの 3 年間志願者数が募集人員を下回っていたが、2007 年度入学試験においては、志願者が募集

人員を上回る結果となった。

現在のところ入学定員の見直しがなされた結果、造形学部各学科の入学定員及び編入学定員は、適正に満たされているといえよう。

●改善・改革方策

将来構想委員会の答申や近年の各学科の動向を踏まえて、これからの武蔵野美術大学の教育研究のあり方を見据え、基礎となる学科の入学定員及び編入学定員、学科間の転科、学科の専攻への分割等について、1年間という限定された期間ではあるが「学科定員等検討委員会」といった組織を設置し、検討を行ってきている。

現在も欠員を生じている学科はないが、本学の入学志願者の減少が進行し倍率の低下した学科が存在する状況に対しては、優秀な学生を確保するために今後も同様な組織を設置し全学的に検討を継続していく必要がある。

A群 退学者の状況と退学理由の把握状況

●現状把握

造形学部における過去3年間（2004年度から2006年度）の退学者数の状況は「大学基礎データ調書（表17）」のとおりである。

2004年度から2006年度までの3年間の学科別の退学者の合計は日本画学科4名、油絵学科43名、彫刻学科5名、視覚伝達デザイン学科16名、工芸工業デザイン学科25名、空間演出デザイン学科22名、建築学科27名、基礎デザイン学科15名、映像学科23名、芸術文化学科38名、デザイン情報学科35名となっている。

<表5>

	2004年度	2005年度	2006年度
一身上の理由	22	23	29
進路変更	19	21	17
連続留年（連続卒業延期）	9	14	12
学費未納	14	25	19
経済上の理由	3	3	1
病気	4	4	3
死亡	1	2	1
留学・勉学意欲の喪失		2	2
その他	2		1
合計	74	94	85

学生の受け入れ

一身上の理由には進路変更（他大学進学）、経済上の問題等さまざまな理由が包含されている。

病気その他やむを得ない理由によって退学しようとするときは学長に願い出ることとされているが、退学希望者に対しての事務手続きは、まず退学希望者がその旨を教務課授業担当へ申し出た後、学籍担当者が退学の事務的な手続きの説明を行い、その時点で退学理由の聴取等を行っている。「退学願」は基本的に教務課学籍担当まで持参させ、提出させている。ただし、状況によっては郵送でも受理している。提出する前提として、所属学科研究室への本人からの報告を進言しているが義務付けてはいない。

「退学願」は教務学生生活委員会委員、学年担当教員をへて主任教授の捺印がなされた後、学長宛に提出され、直近の教授会にて決定される。上記の連続留年、卒業延期中に卒業要件を満たさない、学費未納、死亡等の場合には退学とされる。

●点検・評価

造形学部の各年度の在籍者数（5月1日現在）に対する退学者及び除籍者の割合は<表6>のとおりである。

2004年度から2006年度までの3年間の学科別の退学者及び除籍者の割合をみると、2005年度の油絵学科、建築学科、デザイン情報学科、2005年度・2006年度の芸術文化学科の退学者率が3%台とやや高い。しかし、造形学部全体の在籍者数に対する退学者の割合の3年間の平均は2.01%であり、2%程度と大学全体からみて低水準であるといえる。

<表6> 在籍者に対する退学者割合の推移

年度 学科名	2004年度			2005年度			2006年度		
	在籍者	退学者	比(%)	在籍者	退学者	比(%)	在籍者	退学者	比(%)
日本画学科	139	2	1.44	142	1	0.70	151	1	0.66
油絵(油絵・版画)学科	569	13	2.28	566	17	3.00	573	13	2.27
彫刻学科	143	1	0.70	143	2	1.40	145	2	1.38
視覚伝達デザイン学科	439	4	0.91	436	7	1.61	443	5	1.13
工芸工業デザイン学科	563	5	0.89	567	14	2.47	569	6	1.05
空間演出デザイン学科	505	10	1.98	506	3	0.59	513	9	1.75
建築学科	327	8	2.45	328	10	3.05	337	9	2.67
基礎デザイン学科	304	3	0.99	319	6	1.88	318	6	1.89
映像学科	348	7	2.01	336	6	1.79	365	10	2.74
芸術文化学科	395	10	2.53	407	13	3.19	396	15	3.79
デザイン情報学科	421	11	2.61	430	15	3.49	422	9	2.13
計	4,153	74	1.78	4,180	94	2.25	4,232	85	2.01

退学者及び除籍者の学年別の内訳では、2004年度をみると1年次生に多いようにもみえるが、3年間を通してみると特に特定の学年に偏っているわけではない（大学基礎データ調書・表17）。

多くは退学の意味表示がなされた段階で、各学科研究室の主任教授、教務学生生活委員、担当助手のもとで退学理由の把握をした上で、書類を作成している。かなり丁寧な対応をとっているといえよう。

●改善・改革方策

2001年から「学生相談室」を設け、学業や経済上の問題他、学生生活全般にわたる学生の抱える種々の悩み事等の相談に応じており、このことが退学者を減じる一助となっている。

経済上の問題を退学理由とする者に対しての方策としては、学力、人物ともに優れ、経済的に修学が困難であると認められるものについては、すでに武蔵野美術大学奨学金等の学内奨学金（贈与）制度やその他種々の奨学金制度が設けられているが、武蔵野美術大学奨学金については2003年度から増額がなされ、さらなる制度の充実がはかられている。また、家計を支えている人の失職、死亡、不慮の事故（災害など）によって家計が急変し、学業の継続が難しくなった場合には、定期採用枠とは別に奨学金の緊急採用枠を設けており、学生生活課が窓口となってこれに対応している。2000年度までは緊急採用枠は3名であったが、2001年度以降さらに枠を拡大し10名としている。

学費については1981年度以降スライド制を採用していたが、1997年度から、それまでのスライド制を廃止した。

C群 編入学生及び転科・転部学生の状況

●現状把握

2007年度3年次編入学試験の募集人員は<表7>のとおりである。

<表7> 造形学部3年次編入学試験定員

学部	学科	定員	
造形学部	日本画学科	若干名	
	油絵学科	油絵コース 版画コース	15名
	彫刻学科		若干名
	視覚伝達デザイン学科		10名
	工芸工業デザイン学科	クラフトデザインコース インダストリアルデザインコース インテリアデザインコース	15名
	空間演出デザイン学科	セノグラフィデザインコース 空間計画・空間構成コース ファッションデザインコース	10名
	建築学科		4名
	基礎デザイン学科		5名
	映像学科		若干名
	芸術文化学科		若干名
	デザイン情報学科		若干名

造形学部において3年次編入学試験は、2000年度まで主に学内短期大学部学生の進学希望者に対する造形学部・短期大学部連動教育として位置づけられていた。同時に退学者等の欠員が生じた場合の欠員募集を勘案して実施されてきた。教育組織の改組転換により2001年度以降からは本学の短期大学部からの志願者はなくなる結果となったが、編入学の募集人員について、定員の定めのある学科とそうでない学科が存在することは上記の理由による。

現在では、学内外より広く、美術、デザインの専門性を高めることを希望する者の受け入れを主目的として、3年次編入学試験を実施している。

出願資格は、学士の学位を有する者又は取得見込みの者、短期大学卒業生又は卒業見込み者、高等専門学校卒業生又は卒業見込み者、大学に2年以上在学し62単位以上

を修得した者又は修得見込みの者、専修学校の専門課程を修了した者又は修了見込み者、外国において学校教育における14年以上の課程を修了した者又は修了見込み者、学校教育法施行規則第92条の3の規定により、大学の第3学年に編入学できる者であり、美術・デザイン分野の学習経験等の条件は特に設けていない。

なお、出願時に本学造形学部通信教育課程に正規の課程として1年以上在学している者（見込み者を含む）をA群、それ以外の者をB群とし、学内転科希望者をC群として区分し、出願を受け付けている。しかし、試験内容についてはA群、B群、C群とも共通となっており、合格者の判定についても、定員を設けている学科においても群ごとの定員はなく、A群、B群、C群全体の中から高得点者順に合格としている。

選考方法は各学科の専門性に則した内容となっており、その詳細は〈表8〉のとおりである。

芸術文化学科においてはB群に社会人入学試験を設けており、社会人入学試験の出願資格は大学、短期大学、高等専門学校、専修学校専門課程を卒業又は修了した者及び大学に2年以上在学し62単位以上を修得した者で、2007年4月1日現在、満24歳以上で、職務経験（臨時勤務も含む）が通算3年以上の者となっている。

留学生・帰国生に対しても門戸を開いている。特に試験を行う上で特別な配慮はしておらず日本人と同等の条件による試験を実施しているが、毎年度多くの留学生からの出願がある。2007年度3年次編入学試験には留学希望生20名からの出願があり、その内4名の者が合格している。

現在、造形学部在学生在が他学科への転科を希望する場合は3年次編入学試験を受験し、合格すれば転科することができる制度となっている。2007年度は244名の志願者のうち転科希望C群の志願者は34名あり、合格者80名の内14名が学内からの転科希望者であった。

学生の受け入れ

<表 8> 造形学部 3 年次編入学試験選考方法

学科	選考方法		持参作品等
日本画学科	書類審査、面接	A 群	① 絵画作品 2 点 [日本画 50 号以上 1 年以内に制作したもの] ② ポートフォリオ [A4 サイズのファイルに作品写真など 10 点程度]
	作品審査	B 群	
	実技試験 [鉛筆デッサン]	C 群	
油絵学科 油絵コース 版画コース	書類審査、面接	A 群	① 実技作品 2 点 ② ポートフォリオ [A4 サイズのファイルに作品写真など 10 点程度]
	作品審査	B 群	
	実技試験 [デッサン]	C 群	
彫刻学科	書類審査	A 群	① 実技作品 [近作] 3 点 [面接時にその他としてポートフォリオを持参してもよい]
	面接、作品審査	B 群	
	実技試験 [鉛筆デッサン]	C 群	
視覚伝達 デザイン 学科	書類審査	A 群	① ポートフォリオ [A3 サイズの台紙 20 枚以内に、写真、コピー、オリジナル、 文章を構成し、作品又はその制作過程をまとめたもの]
	作品審査	B 群	
	実技試験 [デザイン]	C 群	
工芸工業 デザイン 学科	書類審査	A 群	① 実技作品 3 点 ② ポートフォリオ [A2 サイズの台紙にまとめたもの]
	面接	B 群	
	作品審査	C 群	
空間演出 デザイン 学科	書類審査	A 群	① 近作 3 点 ② ポートフォリオ [日頃の成果を写真、図表等でまとめたもの]
	面接、作品審査	B 群	
	実技試験 [デザイン]	C 群	
建築学科	書類審査	A 群	① 近作又は論文 ② ポートフォリオ [日頃の成果を写真、図表等でまとめたもの]
	面接、作品審査	B 群	
	実技試験 [デザインテスト]	C 群	
基礎 デザイン 学科	書類審査	A 群	① 論文又は制作物
	面接、小論文 [出題による]	B 群	
	論文又は制作物の審査	C 群	
映像学科	書類審査	A 群	① 2 年以内に制作した作品 2 点 [論文又はポートフォリオも含む]
	面接、作品審査	B 群	
	小論文 [出題による]	C 群	
芸術文化 学科	書類審査、面接	A 群	① ポートフォリオ
	小論文 [出題による]	B 群 [一般] C 群	
	書類審査、面接	B 群 [社会人]	① ポートフォリオ
デザイン 情報学科	書類審査	A 群	① ポートフォリオ [過去 2 年間の作品・論文などの研究成果を A3 版のファイル形 式によって、わかりやすくまとめたもの]
	面接、小論文 [出題による]	B 群	
		C 群	

●点検・評価

編入学定員については「A群 学生収容定員と在籍学生数、(編)入学定員と入学者数の比率の適切性」の項ですでに述べたが、短期大学部の募集を停止した段階で、3年次編入学試験によって現在の水準の学生を引き続き定員どおり確保できるかは問題となっていた。そのため、全学的な入学定員の見直しにともない、本学短期大学部の存在を前提とし編入学定員を設定した学科で、編入学定員に満たない現実又は可能性のある4学科(油絵学科、工芸工業デザイン学科、空間演出デザイン学科、基礎デザイン学科)については2006年度から定員の削減が行われた。その結果、定員の定めのない学科を除き編入学定員は79名から59名となり、上記の問題は改善された。

また、編入学試験の合格者に転科者が占める割合は<表9>のとおりであり、2002年度から2005年度にかけて高い比率を占めていたため、将来構想委員会答申並びに教育課程検討専門委員会報告「転科制度の基本的な考え方」において、学則に位置づけられた転科を3年次編入学試験の中で実施していることについて制度上問題があるとの指摘を受けていた。転科は本来、造形学部 に在籍している学生の進路変更を審査のうえ認める制度であり、学外からの優秀な学生を受け入れるための編入学試験とはその理念や選考の基準は異なるものであるが、今すぐ3年次転科審査を編入学試験と切り離して実施することは困難であり、転科については当面C群とし、それまでのA・B群に加え、出願時に区分し2006年度入学試験から実施をすることとしたが、将来においては編入学試験と切り離した制度として独立させるべきものと考えられる。

<表9> 造形学部3年次編入学試験における転科者が占める比率

	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度
志願者数	232	226	201	241
合格者数	94	93	96	92
転科志願者数	23	25	26	43
転科合格者数	14	14	14	20
転科志願者比率	9.9%	11.1%	12.9%	17.8%
転科合格者比率	14.9%	15.1%	14.6%	21.7%

●改善・改革方策

編入学及び転科は、それを希望する学生に対して利点があるばかりでなく、受け容れる3年次以降の教育を活性化するためにも必要な制度であるので、現状の受け入れ学生の水準を保ちながら、現行の人数の受け入れを継続する。

2) 大学院における学生の受け入れ

A群 大学院研究科の学生募集の方法、入学者選抜方法の適切性

B群 成績優秀者等に対する学内推薦制度を採用している大学院研究科における、そうした措置の適切性

●現状把握

本学大学院造形研究科には修士課程並びに博士後期課程が設置されている。

修士課程は専攻内でさらに専門に則したコース制をとっている。美術専攻には日本画コース、油絵コース、版画コース、彫刻コース、造形学コース、芸術文化政策コースが、デザイン専攻には視覚伝達デザインコース、工芸工業デザインコース、空間演出デザインコース、建築コース、基礎デザイン学コース、映像コース、写真コース、デザイン情報学コースが設けられている。各コースの専門性がきわめて高いことから、入学試験はコースごとに実施されている。また、学部生の進路選択の観点から、コースによってはA日程（10月）とB日程（2月）の年2回実施している。

2007年度修士課程の日程別入学試験実施状況は<表10>のとおりである。

<表10> 大学院造形研究科（修士課程）入学試験日程

専攻	コース	入学試験日程	
		A日程（10月）	B日程（2月）
美術専攻	日本画コース	—	○
	油絵コース	—	○
	版画コース	—	○
	彫刻コース	—	○
	造形学コース	○	○
	芸術文化政策コース	○	○
デザイン専攻	視覚伝達デザインコース	○	○
	工芸工業デザインコース	○	—
	空間演出デザインコース	○	○
	建築コース	○	○
	基礎デザイン学コース	—	○
	映像コース	○	—
	写真コース	○	—
	デザイン情報学コース	○	○

修士課程の試験科目については大学院の教育目的である「武蔵野美術大学大学院は、学部における一般的・専門的教育の基礎のうえに、美術・デザインに関する専門の技能、理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めた人材を養成し、もって文化の創造・発展に寄与することを目的とする。」（武蔵野美術大学大学院規則第1条）に基づき、小論文、面接を課し、幅広い教養、論述力、研究テーマ並びに研究計画、研究に対する姿勢をみる一方、各コースで研究を進めるにあたり必須となる専門的な技能、知識を作品、論文審査、各コース独自の試験によってみている。

2007年度修士課程入学試験の選考方法・提出作品等の詳細は<表 11-1、11-2>のとおりである。

<表 11-1> 大学院造形研究科（修士課程）選考方法

専攻	コース	選考方法	提出作品等
美術専攻	日本画コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技（素描）	日本画近作 100 号程度 2 点 (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	油絵コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技（デッサン）	①近作 100 号程度 2 点 ②ポートフォリオ
	版画コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技（デッサン）	版画近作 5 点 (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	彫刻コース	書類審査、面接、作品審査、 小論文、実技（デッサン）	彫刻近作 2 点 (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	造形学コース	書類審査 面接 作品審査 小論文 外国語 (英語、仏語から 1 つ選択、外国人は日本語)	A 日程：近作 1 点（作品又は研究論文） (作品にはその創作意図について 2000 字程度の解説を添える。大学卒業見込者については研究計画書 4000 字程度を提出してもよい) B 日程：近作 1 点（作品又は研究論文） (作品にはその創作意図について 2000 字程度の解説を添える。大学卒業後 2 年を超える場合は、卒業制作又は論文とともに、最近の作品又は研究論文も提出すること)
	芸術文化政策コース	書類審査 面接 作品審査 小論文（英語含む）	①研究計画書 (研究テーマを A4 サイズ、ワープロ 1200 字程度にまとめたもの) ②ポートフォリオ

学生の受け入れ

<表 11-2> 大学院造形研究科（修士課程）選考方法

専攻	コース	選考方法	提出作品等
デザイン専攻	視覚伝達デザインコース	書類審査、面接、作品審査、小論文及び設問	ビジュアルデザインに関する近作2点以上 (ただし提出物に研究論文を加えてもよい)
	工芸工業デザインコース	書類審査 面接 作品審査 小論文	工芸工業デザインに関する下記の物を提出 ①作品2点以上 ②ポートフォリオ又は論文 ③大学院入学後の研究計画案 (A4サイズ、書式自由、800字以上1200字以内)
	空間演出デザインコース	書類審査、面接、作品審査、小論文	空間演出デザインに関する近作2点以上
	建築コース	書類審査、面接、作品審査、小論文、外国語(英語)	近作(建築作品)
	基礎デザイン学コース	書類審査、面接、作品審査、小論文、外国語(英語、ただし外国人は日本語の選択も可)	近作1点(作品又は研究論文) (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)
	映像コース	書類審査 面接 作品審査 小論文	①近作2点 (論文又はポートフォリオも含む) ③研究計画書 (A4サイズ、書式自由、800字以上1200字以内)
	写真コース	書類審査 面接 作品審査 小論文	①近作2テーマ以上 (論文又はポートフォリオも含む) ③研究計画書 (A4サイズ、書式自由、800字以上1200字以内)
	デザイン情報学コース	書類審査、面接、作品審査、小論文、外国語(英語)	近作1点(作品又は研究論文) (そのほかにポートフォリオを提出してもよい)

博士後期課程の試験については、実技試験は課していない。修士課程との接続性を踏まえ、修士課程までの制作や研究の成果、専門に関する知識、博士後期課程での研究計画や研究に求められる専門的な知識や語学能力に基づいて、博士後期課程での研究の展開の可能性を口述試験(面接)によって評価することを中心として選考を行っている。また、それによって見られない能力を補完する意味で小論文と英語を課している。

造形研究科の学生募集は修士課程、博士後期課程とも一般選抜のみを行っている。募集定員は修士課程が美術専攻28名、デザイン専攻28名、博士後期課程が造形芸術専攻6名となっている。

学内の志願者はすべて学外の志願者と同条件のもとに同内容の入学試験を受けることになっており、学内推薦制度は採用していない。

なお、受験資格事前審査の制度により、学士の学位を持たないものにも、受験資格を与える場を設けている。修士課程では個別入学資格審査により「本大学院において、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認められた者で、22歳に達した者及び当該年度内に22歳に達する者」について出願を認めている。同様に博士後期課程では個別入学資格審査により「本大学院において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、24歳に達した者及び当該年度内に24歳に達する者」についても出願を認めている。修士課程については入学試験委員会で、博士後期課程については博士後期課程運営委員会で入学試験のあり方等の検討が通年行われている。

●点検・評価

修士課程、博士後期課程とも、志願者の研究に対する姿勢、当該専門分野に関する業績及び能力、研究テーマに対する思考法や方法論をみる試験内容となっており、概ね良好である。

●改善・改革方策

博士後期課程の全学に開かれた入試制度は、公平性を担保する意味で今後も継続する。

- A群 他大学・大学院の学生に対する「門戸開放」の状況
 B群 ・「飛び入学」を実施している大学院研究科における、そうした制度の運用の適切性
 ・社会人学生の受け入れ状況

●現状把握

造形研究科では、基礎となる本学造形学部出身者以外からも広く学生を受け入れている。

修士課程における過去5年間の受け入れ状況は<表12>のとおりである。

<表12> 大学院造形研究科（修士課程）学外からの合格者の推移

	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
学外からの志願者数	51	76	79	90	95
学外からの合格者数	21	32	32	32	32

同様に博士後期課程においても、他大学の修士課程修了者を受け入れている。2007

学生の受け入れ

年度受け入れ者 6 名のうち、他大学修士課程修了者は 1 名である。

修士課程、博士後期課程とも入学試験は本学出身者、他大学出身者とも同条件、同内容の試験方法となっており、厳正かつ公正な判定が行われている。

現在のところ、本学出身者の「飛び入学」は実施していない。また社会人学生のみを対象とした入学制度はないが、受け入れは行っている。

●点検・評価

修士課程においては、他大学出身の学生が 2006、2007 年度ではやや減少したものの、3 割から 4 割を占めており、受け入れ状況は概ね良好であるといえる。博士後期課程においても募集初年から他大学院出身の学生を受け入れている。

「飛び入学」については、制度自体新しいため、現在のところ導入を検討するに至っていない。また造形研究科では現在、社会人が仕事を続けながら単位を修得できるような昼夜開講制等の仕組みは導入していない。これは美術・デザインという専門分野の性質上、集中的に通学し、時間をかけて制作・研究を行うことが不可欠なためである。したがって、社会人のみを対象とした入試制度は導入していない。

●改善・改革方策

他大学・大学院出身者に対しては、従来どおりの志願者を集めることができるよう、広報等の施策を引き続き行う。また、社会人の受け入れに当たっては、従来どおり、社会での業績、制作等の実績を評価しうる入学試験を継続する。

C 群 外国人留学生の受け入れ状況

●現状把握

本学は建学以来、世界的な視野での美術教育を実施しており、国際交流に尽力してきた。外国人留学生の受け入れは、そのような視点での教育にとって刺激となるものであり、また本学の教育を世界的に広めることにもなる。そのような主旨で造形研究科では外国人留学生も広く受け入れている。修士課程における受け入れ状況は<表 13 >のとおりである。

なお、入学試験は基本的に日本人の受験生と同条件、同内容となっているが、美術専攻造形学コース、デザイン専攻基礎デザイン学コースでは、外国語の試験において、外国人留学生は「日本語」を選択できる措置をとっている。

＜表 13＞ 大学院造形研究科（修士課程）外国人留学生合格者の推移

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
外国人留学生志願者数	28	32	34	33	41
外国人留学生合格者数	15	15	10	11	16

博士後期課程においても、外国人留学生を受け入れている。2007 年度受け入れ者 6 名のうち、外国人留学生は 3 名である。入学試験は日本人の受験生と同条件、同内容となっている。

●点検・評価

修士課程においては、志願者のうち例年約 4 割が合格しており、受け入れ状況は良好であるといえる。博士後期課程においても募集初年より外国人留学生を受け入れている。

●改善・改革方策

本学教育の国際化という考えを展開するためにも、現状の大学院における外国人留学生の質と人数を維持するよう努める。

A 群 収容定員に対する在籍学生数の比率及び学生確保のための措置の適切性

●現状把握

造形研究科の入学定員、収容定員と在籍学生数は「大学基礎データ調書（表 18）」のとおりである。入学定員は修士課程 56 名（美術専攻 28 名、デザイン専攻 28 名）となっており、2004 年度に開設された博士後期課程造形芸術専攻の入学定員は 6 名となっている。収容定員は修士課程 112 名（美術専攻 56 名、デザイン専攻 56 名）となっており、博士後期課程造形芸術専攻の収容定員は 18 名となっている。造形研究科全専攻の収容定員は 130 名である。

また造形研究科美術専攻は収容定員 56 名に対し在籍学生数が 112 名となっており、収容定員に対する比率は 2.00 倍となっている。造形研究科デザイン専攻は収容定員 56 名に対し在籍学生数が 94 名となっており、収容定員に対する比率は 1.68 倍となっている。修士課程収容定員 112 名に対しての修士課程全学年の在籍学生数は 206 名で収容定員の 1.84 倍となっている。博士後期課程造形芸術専攻は収容定員 18 名に対し在籍者が 23 名となっており、収容定員に対する比率は 1.28 倍となっている。

学生確保のために大学院造形研究科の課程案内を作成している。また修士課程、博士後期課程とそれぞれに募集要項を作成し、志願者への広報活動を行っている。また、博士後期課程については特別奨学金として「武蔵野美術大学大学院博士後期課程奨励

学生の受け入れ

奨学金制度」を設けている。また、2004年度には1年間に期間を限定し「学科定員等検討委員会」を設け、大学院造形研究科の定員の見直しも含めたかたちで検討がなされた結果、2006年4月から写真表現の専門教育を行う写真コースを造形研究科デザイン専攻に新設することとし、造形研究科の実収容人数も増加を見込むこととなった。

●点検・評価

本学の教育をさらに深化させるためには、大学院を設置し、学部・学科構成を充実、完結する必要があるとの設置趣旨により、1973年4月大学院造形研究科修士課程が認可された。発足当時の収容定員は造形研究科美術専攻14名、デザイン専攻14名の1年次の入学定員合計28名、2年次合わせて56名であった。1994年度より、修士課程美術専攻28名、デザイン専攻28名と1年次の入学定員は合計56名と定員増となり、2007年度現在では、2年次までの収容定員112名となっている。2004年度には博士後期課程として入学定員6名、収容定員18名の造形芸術専攻が認可され、大学院造形研究科の収容定員は拡大してきた。

収容定員に対する在学学生数は現在1.76倍と超過している。しかし、収容人数については各コース研究室からの希望により、学生の相互啓発・活性化や指導効果等の観点から望ましいと思われる募集人数を確保した結果であり、超過人数もコース毎では数名であり、授業に支障ない範囲での受け入れとなっている。また、退学者数も2006年度には4名（除く博士後期課程）となっており、定着率は高いといえる。

●改善・改革方策

2007年度の志願者は、修士課程の定員56名に対して206名、博士後期課程の定員6名に対して10名であった。また、実際の受入数は、修士課程の定員56名に対して113名、博士後期課程の定員6名に対して6名であった。この数は、施設等の教育条件を勘案した結果である。学生確保には問題がないといえるが、引き続き、大学院における教育研究の成果の公開、広報等を行う。